

北海道大学クラーク会館第46回パイプオルガン演奏会

パイプオルガンの夕べ

「イタリアからの風、フレスコバルディ～バッハ～レーガー」

パイプオルガン：工藤羊子（日本キリスト教団札幌中央教会オルガニスト）

プログラム

G. フレスコバルディ

「トッカータ 2番」1627年出版 第二曲集より
「聖体拝領のあとのカンツォーナ」フィオーリ・ムズィカーリより
「使徒書簡のあとのカンツォーナ」フィオーリ・ムズィカーリより

J.S. バッハ

「カンツォーナ 二短調」

J. パッヘルベル

「リチャカー 嬰へ短調」

「トッカータ 二短調」

「フーガ へ長調」

J.S. バッハ

「協奏曲 二短調」原曲：ヴィヴァルディの協奏曲 Op.3 Nr.11

D. ブクステフーデ

「プレリュードとフーガ ト短調」

J.S. バッハ

「トッカータ、アダージョとフーガ 八長調」

M. レーガー

「トッカータ、フーガ」Op.59より

2001年11月15日(木)

18:00 開場

18:30 開演

場 所：北海道大学クラーク会館講堂（札幌市北区北八条西8丁目）
（入場無料）

主 催：北海道大学

協 力：北海道大学オルガン研究会

バッハの音楽は、様々な作曲家の作品、様式を取り入れ、自分のものとし、さらに発展させ、形成されたものです。1708～1717年の2度目のヴァイマル時代には、イタリア様式に触れ、多数の曲を書きました。今日は、その中から「カンツォーナ」「協奏曲」「トッカータ、アダージョとフーガ」の3曲を選び、バッハに影響を与えた作曲家の作品および、バッハを敬愛していたレーガールの作品を演奏させていただきます。

G. フレスコバルディ (1583～1643)

Girolamo Frescobaldi

北イタリアのフェッラーラに生まれ、25歳で、ローマ・サンピエトロ大聖堂のオルガニストとなる。この時代のイタリア音楽界の巨匠。当時、多くの音楽家が、彼の教えを受けるため、ローマへとやって来た。

1. 「トッカータ 2番」1627年出版 第二曲集より *Toccata seconda (Il secondo Libro di Toccate)*

* トッカータの語源：鍵盤に<触れる> toccare イタリア語

この時代のトッカータの特徴が良くわかる一曲。すなわち、数小節から成る多数の和声的、あるいは模倣ふうな部分によって構成されている。それぞれの部分は、即興ふうに、曲想によって、速さなどを変化させ演奏される。フレスコバルディは、トッカータに対して、特に思い入れがあったらしく、その演奏に際しての諸注意（注文）を書き残している。そして、そのほとんどが、楽譜から離れた即興的奏法に関してのものである。

2. 「聖体拝領のあとのカンツォーナ」フィオーリ・ムズィカーリより

Canzon post il Comune (Fioli musicali)

3. 「使徒書簡のあとのカンツォーナ」フィオーリ・ムズィカーリより

Canzon dopo la Pistola (Fioli musicali)

* カンツォーナの語源：<歌> chanson プロヴァンス語

カンツォーナは、多部分形式の楽曲であるが、テーマを旋律的、リズム的に変奏していくことにより、曲の統一性をはかっている。これらの曲は、トッカータとは、対極にあるもので、テーマが各声部に現れる模倣的形式でかかっている。

このような主題模倣や対旋律の構成法などから、フーガの前身となる楽曲形式といえる。フレスコバルディは、この<変奏カンツォーナ>と呼ばれる形式を確立した。

最初の曲は、短いアダージョの間奏をはさみ、3つの部分から成る。

第一部のテーマは、よく使われる<4分音符、8分音符、8分音符>のリズムではじまる。このテーマが、第二部、第三部に変奏され、模倣的書法で作られている。第一部は、ゆるやかに、第二部はながれるような3拍子、第三部は、第一部のモチーフから始められ、躍動的に表現されている。

次の曲は、4分の4拍子と4分の3拍子の2つの部分から成る。前曲にも使われているリズムでテーマがはじまり、第二部ではそれが変奏されて使われている。この曲の2小節目から現れる、テーマの逆行形は、次に弾く、バッハのカンツォーナのテーマとなった。

J.S. バッハ (1685～1750)

Johann Sebastian Bach

4. 「カンツォーナ 二短調」

Canzona in d-moll (BWV 588)

バッハは、ヴァイマル時代にフレスコバルディのフィオーリ・ムズィカーリを手に入れ、これを研究した。その結果、この曲が生まれたのであるが、どのように研究し、バッハ自身のものとしたのかを知ることができる。

4拍子と3拍子の2部から成る曲であり、テーマは、前述のとおりフレスコバルディのもの。このテーマは、4声の間で模倣されており、前半はなだらかな運びだが、3拍子の部分は、跳躍進行が多く、活発な印象がある。

J. パッヘルベル (1 6 5 3 ~ 1 7 0 6)

Johann Pachelbel

中部ドイツ、ニュルンベルクの生まれだが、仕事の都合などで、ヨーロッパ各地を転々としたため、それぞれの地の異なった音楽様式に触れることができ、それらを統合して作曲した。J.S. バッハの先駆者として有名。

5 .「リチャカー 嬰へ短調」

Ricercar in fis-moll

* リチャカーの語源：探求 <ricercare> イタリア語 (リチャカーはドイツ語)

16世紀中頃のリチェルカーレは、テーマに基づいた対位法的書法の曲であったが、その後、様々なテーマによる小部分に分かれていたものが、主要なテーマが曲の最後まで現れ、第一冒頭にしかなかったテーマの提示方法が、全曲を通して使用されるようになり、古典的フーガとなった。

この曲は、テーマのすぐ後に、テーマの反行形が追いかけて、中ほどに今度はテーマの逆行形のようなモチーフとその反行形が現れる。これら4つの旋律が絡み合い、一つの曲となっていることから、ほとんど古典的フーガに近いといえる。

6 .「トッカータ 二短調」

Toccata in d-moll

フレスコバルディ風トッカータではあるが、明確な拍子の交替は、なくなっている。即興的部分の音もすべて楽譜に、記してあるのが、いかにもドイツ人らしく感じる。

7 .「フーガ へ長調」

Fuga in F-Dur

* フーガの語源：逃走 <fuga> ラテン語

フーガとは、簡単に述べると、定められた法則により、テーマが提示され、各声部に全曲を通じて現れ、厳格な対位法を用いた、楽曲形式。

この曲のテーマは、カンツォーナによく使われるリズムで始められる。パッヘルベルが、イタリアの音楽にもよく通じていたことから、このようなテーマを使ったものと思われる。フーガとされているが、

バッハのものに比べると、発展途上という感がある。

J.S. バッハ (1 6 8 5 ~ 1 7 5 0)

Johann Sebastian Bach

8 .「協奏曲 二短調」

ヴィヴァルディの協奏曲 op.3 Nr11(RV565)の編曲

Concerto d-moll (BWV596)

Concerto d-moll op.3 Nr.11 (RV565) von A.Vivaldi

2つの独奏ヴァイオリンと独奏チェロに合奏 (ヴァイオリン、ヴィオラ、通奏低音) が加わった、ヴィヴァルディ作曲の協奏曲を、バッハがオルガン曲に編曲したもの。この作業は、バッハにおける「イタリア体験」と呼ばれる経験であった。きっかけは、エルンスト公子の要請であったが、5曲を編曲したことは、バッハがイタリア様式を自己のものとするための大いなる力となった。

曲は、アレグロ、アダージョ (3小節) フーガ、ラルゴ (シチリアーノ形式) アレグロから成る。

~ 休憩 ~

D. ブクステフーデ (1 6 3 7 ~ 1 7 0 7)

Dietrich Buxtehude

デンマーク出身のドイツの作曲家。1668年からリューベックの聖マリア教会のオルガニストとなる。オルガン演奏の名手であり、彼の演奏を聴くためにヘンデル、バッハなど多くの音楽家が訪問した。バッハは、彼の音楽に衝撃を受け、自分のものとするために、予定よりずいぶん長くリューベックに滞在することとなった。このことは、ヴァイマル時代のバッハの曲に大きな影響をあたえた。なお、義父のトゥンダーは、ローマでフレスコバルディの教えを受けていた。このことは、ブクステフーデがイタリア様式を取り入れる際の助けとなったと思われる。

